

# 花降り上人

## 飯塚を歩く

桜の季節になると、ある僧の名が思い出されます。440年以上前の1573(天正元)年に、飯塚(豊和地区)光福寺に学徒を集め日蓮宗の談所(学問所)を開いた日統上人のことです。

日統は1579(天正7)年旧暦の3月7日に亡くなり、葬送の時に桜の花が舞い散ったと伝わることから「花降り日統上人」と呼ばれています。飯塚生まれの日統は、光福寺で僧侶となり、関西の有名寺院に遊学しました。そこで学び多くの研究成果を修めた

後、郷里に帰り7代目住職となりました。関東での日統の名声を知ってか、関西で共に学んだ僧らは学徒30余人と共に、はるばる飯塚に集まりました。

日統の死後、飯高村妙福寺さらに飯高寺に移った学僧らは、同寺に開かれた檀林の基礎を築き学徒を教育しました。飯高檀林発展のきっかけは、日統上人の開いた飯塚談所とされています。

「花降り上人」と呼ばれる僧がもう一人います。『日蓮宗の人びと』(昭和51年刊)によ

日統上人供養塔の「聖教塚」

ると、下総生まれの日充(にちつ)という僧で、香取郡岩部村(現在の香取市栗源)の寺で学室を開いて指導に当たった

とされています。

日充上人には不思議な行跡がいくつも伝えられていて、その一つに次の話があります。晩年病気になった上人は庵室を訪れた信者に「明日、いよいよお別れします」と伝え、人びとがお経を唱える中で亡くなりました。時は日統上人と同じ天正7年の旧暦正月15日とされています。その葬送の時、棺(ひつ)からひと流れの幡(のぼり)が空にのぼったように見え、辺りには良い香りが満ちあふれた。妙なる花ばなが舞い巡り、いつのまにか消え去ったとのこと。このありさまを目にした人びとは、「花降り上人」として語り継いだそうです。日充の死を1602(慶長7)年とする説もあります。二つの「花降り上人」の話は、春の夜の夢のようでもあります。いずれも記録に残され、日統上人は、没後420年余りを経た平成12年、埋葬地とされる場所に光福寺住職により供養塔が建てられ、「聖教塚」と名付けられました。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

関秘書課広報広聴班

☎73・00800

